『大無量寿経』の諸本について

堀　祐彰

一、はじめに

竺沙雅章氏によると[1]、宋代から元代の大蔵経を三つの系統に分類している。つまり、一つ目は開宝蔵系で高麗大蔵経（初雕本）・金版大蔵経が属する「第一類蔵経」、二つ目は契丹蔵系で房山石経が属する「第二類蔵経」、三つ目は江南諸蔵系統で東禅寺版・開元寺版・思渓版・磧砂版・普寧寺版が属する「第三類蔵経」である。

『大無量寿経』は版本大蔵経以外にも、敦煌写本・トルファン写本、そして日本の写本・版本が存在する。本論文では、それらの『大無量寿経』の諸本について、系統や傾向等について明らかにしていきたい。

二、『大無量寿経』の諸本とは

A、大蔵経系

一、高麗大蔵経（再雕本）、韓国海印寺蔵原本『高麗大蔵経』一一（線装書局影印　四八五～五〇四頁）所収。（以下、高麗版とする）

二、金版大蔵経（大宝集寺本）[2]、『中華大蔵経』（第九冊二八番　五八九～五九八頁）所収。上巻のみ。（以下、金版とする）
三、開元寺版[3]、宮内庁書陵部所蔵本。
四、思渓版、増上寺所蔵本。
五、磧砂版[4]
①線装書局本、『磧砂大蔵経』所収。（以下、線装本とする）[5]
②杏雨書屋所蔵本、大阪・武田科学振興財団杏雨書屋蔵の写真版を用いた。（以下、杏雨本とする）[6]
六、元版大蔵経（普寧寺版）、増上寺所蔵本。（以下、元版とする）
七、明版大蔵経（万暦版）、龍谷大学所蔵本。（以下、明版とする）[7]
八、清版大蔵経、『新編縮本　乾隆大蔵経』所収。（以下、清版とする）[8]

B、石経系

一、房山石経（遼金刻経）、『房山石経』（中国仏教協会）所収。[9]

C、敦煌写本（トルファン写本も含む、以下同）

一、スタイン本四点。いずれも『敦煌宝蔵』九所収。（以下、S1本・S2本・S3本・S4本とする）
二、中国国家図書館所蔵本六点。『敦煌大蔵経』一九所収。『敦煌遺書』第一〇五冊所収。（以下、中1本・中2本・中3本・中4本・中5本・中6本とする）
三、上海図書館所蔵本一点。『敦煌吐魯番文献』三所収。（以下、上海図本とする）[10]

四、北京大学図書館所蔵本一点。『敦煌文献』一所収。（以下、北京大本とする）[11]
五、ペリオ本一点。『敦煌吐魯番文献集成　法蔵敦煌西域文献』三一所収。（以下、ペリオ本とする）
六、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部所蔵本三点。（以下、R1本・R2本・R3本とする）
七、龍谷大学図書館所蔵本一点。（以下、龍大本とする）
八、大谷大学図書館所蔵本一点。野上俊静氏編『大谷大学所蔵　敦煌古写経』所収。（以下、大谷大本とする）
九、『敦煌秘笈』所収本一点。（以下、秘笈本とする）[12]
十、ベルリン国立図書館所蔵本一点。現物未見。（以下、B本とする）
十一、『二楽叢書』所収本一点。（以下、叢本とする）

以上の敦煌写本の中、十については、現物未見。藤田宏達氏の『無量寿経』の諸本対照表[13]に依った。

D、日本写本・版本

一、金戒光明寺所蔵書写本。一二世紀の書写と見られる。（以下、金戒光明寺本とする）
二、清浄華院所蔵書写本。一二世紀の書写と見られる。（以下、清浄華院本とする）
三、正平六（一三五一）年書写本（存覚上人書写本）。（以下、正平本とする）
四、祐誓寺所蔵本（建仁四（一二〇四）年版本）。日本における現存最古の浄土教関係の版本。（以下、祐誓寺本とする）
五、天平六（七三四）年書写本、巻上のみ、逸翁美術館所蔵本。聖武天皇の勅願一切経の一部であると言われる。（以下、天平本とする）

六、中尊寺本、金剛峯寺所蔵本。一二世紀の書写と見られ、中尊寺経といわれる。
七、荒川経本、下巻のみ、金剛峯寺所蔵本。一二世紀の書写と見られ荒川経といわれる。（以下、荒川本とする）
八、七寺所蔵本。一二世紀後半の書写と見られる。（以下、七寺本とする）
九、七寺所蔵本、上巻のみ。一二世紀後半の書写と見られる。（以下、七寺上本とする）

以上の日本写本・刊本の中[14]、五～九は現物未見であるため、藤田宏達氏の『無量寿経』の諸本対照表[15]に依った。

三、諸本の関係

（一）表①について

現在の『大無量寿経』の翻刻の最新である『浄土真宗聖典全書』（三経七祖篇）（以下、『聖典全書』とする）所収の『大無量寿経[16]』との字句の比較を行い、対照表を作成した。その対照表（表①）は、表に示されている版本・写本・刊本と『聖典全書』の底本（浄土真宗本願寺派の本山蔵版本、以下、蔵版本とする）との文字の相違の数を示し、その文字の相違が他本でも同じ字で蔵版本と相違した数を同字数とし、また文字の相違の数全体における同字数の率を同字率として表に示した。すなわち、同字率を明らかにすることで、対照とする両本の系統がどれくらい近いかを表している。

表の一番上には諸本を示し、その下に蔵版本との文字の相違数を示した。さらにその下の数は、全体・巻上のみ・巻下のみの文字の相違数である。引き続きその下は房山石経との比較を示した。房山石経は、刻経石の上部等が剥落して見えない部分があるので、対照とするテキストと蔵版本との文字の相違としている箇所の数をはじき出し、その数から房山石経では剥落して見えない文字の数を引いた。つまり、高麗版では文字の相違数三一〇

個、房山石経で文字が見えない数五五個であるから、三一〇から五五を引いて二五六個。高麗版と房山石経との同字の数九五を二五六で割って三七％。三七％という低い値が同字率であるので、『大無量寿経』に関して房山石経と高麗版は違う系統であるということが言えよう。またその下の金版（巻上のみ）とでは、高麗版と金版が揃って蔵版本と文字が相違している数一七六個、高麗版と金版の同字率八九％とある。『大無量寿経』に関して高麗版と金版は近い系統であることを表している。以下、開元寺版・思渓版・線装本・杏雨本・元版・明版・清版・天平本・金戒光明寺本・清浄華院本・中尊寺本・荒川本・七寺本・七寺上本・正平本・祐誓寺本に関しても、同じ作業を行い、その結果を表①で示した。

だたし、前述したように、天平本・中尊寺本・荒川本・七寺本・七寺上本については、現物未見のために藤田氏の諸本対照表を参照して表①を作成した。[17] 表①では数値の傍に（＊）を記した。藤田氏とは漢字（異体字・同字等）の見方が少し相違するため、統一的に考察することは出来ないからである。[18]

（二）大蔵経と日本写本・刊本の系統

①同字率からの検証

そこで、まず『大無量寿経』の諸本を対照した表①に示した同字率をもとにして、諸本の系統分けを検証していく。高麗版と金版は、それぞれ八九％・八五％とあるように同字率が高く、同系統と言える。また、開元寺版・思渓版・線装本・杏雨本・元版（以下、江南諸蔵とする）のなか、開元寺版以外の諸本同士の同字率は、八〇％以上と非常に高い。特に、思渓版・線装本・杏雨本それぞれ同字率は九〇％以上である。ただ開元寺版においては思渓版（八二％）・線装本（七五％）・杏雨本（七七％）・元版（七六％）と少し数値が下がるものの、江南諸

明版	清版	天平本	金戒光明寺本	清浄華院本	中尊寺本	荒川本	七寺本	七寺上本	正平本	祐誓寺本
292 (上)169 (下)123	296 (上)173 (下)123	176(*) (上)176 (下)—	218 (上)127 (下)91	192 (上)120 (下)72	203(*) (上)139 (下)64	93(*) (上)— (下)93	235(*) (上)146 (下)89	178 (上)178 (下)—	167 (上)123 (下)44	218 (上)129 (下)89
115/234 49%	115/237 49%	74/137 (54%)	60/179 34%	56/155 36%	79/164 (48%)	43/83 (52%)	112/261 (43%)	59/140 (42%)	50/131 38%	58/175 33%
122 42%	121 41%	71(*) (43%)	89 41%	81 42%	95(*) (47%)	41(*) (44%)	97(*) (42%)	81(*) (46%)	75 45%	90 41%
74 44%	74 43%	78(*) (48%)	73 57%	70 58%	65(*) (47%)	— —	64(*) (44%)	85(*) (48%)	70 57%	75 58%
238 82%	239 81%	92(*) (56%)	81 37%	71 37%	112(*) (55%)	62(*) (67%)	142(*) (72%)	75(*) (44%)	58 35%	82 38%
256 88%	259 88%	100(*) (61%)	82 38%	72 37%	112(*) (55%)	62(*) (67%)	143(*) (61%)	77(*) (44%)	62 37%	82 38%
260 89%	263 89%	100(*) (61%)	70 32%	63 33%	109(*) (54%)	57(*) (61%)	138(*) (59%)	75(*) (43%)	58 35%	72 33%
250 86%	253 85%	100(*) (61%)	76 35%	69 36%	110(*) (54%)	58(*) (62%)	138(*) (59%)	76(*) (43%)	63 38%	77 35%
268 92%	271 92%	93(*) (57%)	70 32%	62 32%	107(*) (53%)	57(*) (61%)	136(*) (58%)	74(*) (42%)	54 32%	71 33%
— —	287 97%	79(*) (48%)	62 28%	55 28%	100(*) (49%)	54(*) (58%)	123(*) (53%)	67(*) (38%)	51 31%	63 29%
287 98%	— —	82(*) (50%)	62 28%	55 28%	100(*) (49%)	54(*) (58%)	124(*) (53%)	67(*) (38%)	51 31%	63 29%
83(*) (47%)	86(*) (47%)	— —	54(*) (43%)	49(*) (40%)	89(*) (64%)	— —	98(*) (68%)	96(*) (55%)	50(*) (41%)	51(*) (40%)
62 21%	62 21%	53(*) (30%)	— —	165 85%	63(*) (31%)	25(*) (27%)	67(*) (29%)	44(*) (25%)	127 76%	208 96%
55 19%	55 19%	49(*) (28%)	165 76%	— —	53(*) (26%)	20(*) (22%)	58(*) (25%)	41(*) (23%)	124 74%	163 75%
100(*) (34%)	100(*) (34%)	86(*) (52%)	82(*) (38%)	53(*) (27%)	— —	48(*) (52%)	139(*) (60%)	88(*) (50%)	46(*) (28%)	64(*) (29%)
54(*) (44%)	54(*) (44%)	— —	25(*) (27%)	20(*) (28%)	48(*) (75%)	— —	63(*) (71%)	— —	9(*) (20%)	27(*) (30%)
123(*) (42%)	124(*) (42%)	98(*) (56%)	67(*) (31%)	58(*) (30%)	139(*) (68%)	63(*) (68%)	— —	97(*) (55%)	45(*) (27%)	66(*) (30%)
67(*) (40%)	67(*) (39%)	96(*) (55%)	44(*) (35%)	41(*) (34%)	88(*) (63%)	— —	97(*) (67%)	— —	41(*) (33%)	45(*) (35%)
51 17%	51 17%	50(*) (28%)	127(*) 58%	124 64%	46(*) (23%)	9(*) (10%)	45(*) (19%)	41(*) (23%)	— —	127 58%
63 22%	63 21%	54(*) (31%)	208 95%	163 84%	64(*) (32%)	27(*) (29%)	66(*) (28%)	45(*) (26%)	127 76%	— —

【表①】

諸本		房山石経	高麗版	金版	開元寺版	思渓版	線装本	杏雨本	元版
【蔵版本との文字の相違数】		266 (上)158 (下)108	310 (上)198 (下)112	207 (上)207 —	350 (上)210 (下)140	316 (上)184 (下)132	315 (上)191 (下)124	308 (上)188 (下)120	309 (上)180 (下)111
対照とする諸本	房山石経	— —	95/256 37%	68/168 40%	132/285 46%	129/256 50%	123/251 49%	126/248 51%	125/248 50%
	高麗版	96 36%	— —	176 85%	127 36%	133 42%	130 41%	130 42%	126 41%
	金版	69 44%	176 89%	— —	78 37%	84 45%	81 42%	82 44%	79 44%
	開元寺版	131 49%	127 41%	78 38%	— —	286 91%	264 84%	269 87%	267 86%
	思渓版	129 46%	133 43%	84 41%	286 82%	— —	289 92%	293 95%	288 93%
	線装本	123 44%	130 42%	81 39%	264 75%	289 91%	— —	294 95%	281 91%
	杏雨本	126 45%	130 42%	82 40%	269 77%	293 92%	294 93%	— —	274 89%
	元版	125 44%	126 41%	79 38%	267 76%	288 91%	281 89%	274 89%	— —
	明版	115 41%	122 39%	74 36%	238 68%	256 81%	260 83%	250 81%	268 87%
	清版	115 41%	121 39%	74 36%	239 68%	259 82%	263 83%	253 82%	271 88%
	天平本	73(*) (46%)	71(*) (36%)	78(*) (38%)	116(*) (55%)	105(*) (54%)	104(*) (52%)	104(*) (53%)	99(*) (52%)
	金戒光明寺本	60 23%	89 29%	73 35%	81 25%	82 26%	70 22%	76 25%	70 23%
	清浄華院本	56 21%	81 26%	70 34%	71 20%	72 23%	63 20%	69 22%	62 20%
	中尊寺本	80(*) (33%)	95(*) (31%)	65(*) (32%)	112(*) (32%)	112(*) (35%)	109(*) (35%)	110(*) (36%)	107(*) (35%)
	荒川本	43(*) (40%)	41(*) (37%)	— —	62(*) (44%)	62(*) (47%)	57(*) (46%)	58(*) (48%)	57(*) (51%)
	七寺本	111(*) (42%)	97(*) (31%)	64(*) (31%)	147(*) (42%)	143(*) (45%)	138(*) (44%)	138(*) (45%)	136(*) (44%)
	七寺上本	59(*) (37%)	81(*) (41%)	85(*) (41%)	78(*) (37%)	77(*) (42%)	75(*) (39%)	76(*) (40%)	74(*) (41%)
	正平本	50 19%	75 24%	70 25%	58 17%	62 20%	58 18%	63 20%	54 17%
	祐誓寺本	58 22%	90 29%	75 36%	82 23%	82 26%	72 23%	77 25%	71 23%

（*）：現物未見のテキストのため、注意して考察する必要があることを示す。

蔵以外のものと比較すると高い同字率であり、この考察結果においても、江南諸蔵の諸本は同系統[19]であることが確認できた。

日本の写本・刊本については、一つの系統と見るよりは、まず、江南諸蔵に近いか、否かで分類していくこととする。天平本・中尊寺本・荒川本・七寺本の各本と開元寺版・思渓版・線装本・杏雨本の江南諸蔵の各本との同字率は、それぞれ五〇％以上である。一方、金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本の各本と江南諸蔵の各本との同字率は三〇％台と低い。そこで、両者の系統は違うのではないかと仮定し、天平本・中尊寺本・荒川本・七寺本を日本A経と、金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本を日本B経と分けて考察を進めていくこととする。[20]七寺上本に関しては、高麗版との同字率は四六％、金版とは四八％、江南諸蔵の各本との同字率は四三％前後とはっきりとしないが、天平本との同字率は五五％、中尊寺本とは五〇％、七寺本とは五五％ということから、七寺上本は日本A経に近い、と判断しても良いと思われる。以下、日本A経と日本B経を検証していく。

まず、日本A経と定めた天平本・中尊寺本・荒川本・七寺本について、各本それぞれにおいて日本A経と定めた諸本との同字率は、日本B経と定めた諸本との同字率に比べて高い。一方、日本B経と定めた金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本の各本同士の同字率の数値についても同様に高い。また、七寺上本は、高麗版や金版を対照とした同字率の数値や江南諸蔵の各本を対照とした同字率の数値をみてもはっきりとしなかったが、日本A経の天平本・中尊寺本・七寺本を対照とした同字率の数値は比較的高く、日本B経の諸本を対照とした同字率の数値は低いことから、日本A経に入れてよいだろう。以上のことから、『大無量寿経』の日本写本・刊本を仮に二つの系統に分け、日本A経は天平本・中尊寺本・荒川本・七寺本・七寺上本とし、日本B経は金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本とするという仮定のもと、考察を続けていくこととする。

②経題と訳者名からの検討

経題と訳者名については表②にまとめた。まず経題をみると、高麗版・金版・開元寺版・思渓版・線装本・杏雨本・元版の大蔵経は、巻上の首題で「佛説無量壽經卷上」と、巻上の尾題で「無量壽經卷上」と揃っている。巻下[21]の首題で「佛説無量壽經卷下」と揃っているが、巻上の尾題は首題と異なり、「佛説」のあるものと無いものがある。訳者名については、高麗版金版と江南諸蔵とに分かれる。江南諸蔵の各本には「天竺三蔵」の語が無い。

また注目すべきは、日本B経の諸本のすべてが「佛説無量壽經卷上」「佛説無量壽經卷下」と経の首題・尾題の上下巻ともに揃っていることである。一方、日本A経の天平本・中尊寺本・七寺本では経題に「雙觀無量壽經」とある。「雙觀無量壽經」と書かれていることについて、本経は『雙卷無量壽經』ともいうので「觀」は「卷」の音通であり、『觀無量壽經』にひかれた誤写であろうと言われ、天平一九(七四七)年に唐靖邁撰の『雙觀經疏』(『大無量壽經疏』)を書写した記録があり、早くから錯誤していたようである、とも言われている。[22] また、藤田氏は「平安後期の写経には、たとえば天平写経に見られる「雙觀」の語が使われているように、奈良写経からの転写本と推定されるものが多い」[23]と述べている。日本A経と仮定した天平本・中尊寺本・七寺本について奈良写経からの転写本といえるのかという考察については、さらにすすめていかなければならないが、日本A経は同一系統であるという可能性がさらに高まったということとなる。

訳者名については、日本A経では、脱落や欠失のものもあるが、日本B経では、清浄華院本の巻下だけ、正平本の上下両巻に訳者名が書かれている。

以上のように、日本A経と仮定したもののなか、経題が揃っていないものがあったり、日本B経と仮定したもののなか、訳者名が揃っていないものがあったりするが、その他については各系統によってほぼ表記が揃ってい

明版	清版	日本A経					日本B経				敦煌本
		天平本	中尊寺本	荒川本	七寺本	七寺上本	金戒光明寺本	清浄華院本	正平本	祐誓寺本	
○	○						○	○	○	○	
						○					
		○	○								
					○						
							○	○	○	○	
—（註2）	○	○				○					中2本 龍大本
			○		○						
											大谷大本
○	○		〔欠落〕（註3）				○	○	○	○	
				○							
					○						
○	○						○	○	○	○	
				○							中5本 S2本 S3本
			○（註4）		○						
		〔脱落〕（註5）	—		—	—	—	—	○	—	
○	○										
			〔欠落〕	—	—		—	○		—	
○	○								○		

（註5）：天平本（巻上のみ）の訳者名について、藤田氏によると、「脱落。但し僧鎧の字が薄く見える。別筆らしく消した跡あり」と示す（藤田宏達氏論文「『無量寿経』の日本最古の版経と写経」参照）。
（註6）：房山石経の巻下の訳者名について、「曹魏天竺」は剥落していて見えない。

【表②】

		房山石経	高麗版	金版	開元寺版	思渓版	線装本	杏雨本	元版
巻上首題	佛説無量壽經卷上	×（註1）	○	○	○	○	○	○	○
	無量壽經卷上								
	佛説雙觀無量壽經卷上								
	雙觀無量壽經卷上								
巻上尾題	佛説無量壽經卷上	○							
	無量壽經卷上		○	○	○	○	○	○	○
	雙觀無量壽經卷上								
	佛説無量壽經上								
巻下首題	佛説無量壽經卷下	×	○		○	○	○	○	○
	佛説無量壽經下								
	雙觀無量壽經下卷								
巻下尾題	佛説無量壽經卷下	×					○	○	
	無量壽經卷下		○		○	○			○
	雙觀無量壽經下卷								
巻上訳者名	曹魏天竺三藏康僧鎧譯	×	○	○					
	曹魏康僧鎧譯				○	○	○	○	○
巻下訳者名	曹魏天竺三藏康僧鎧譯	○（註6）	○						
	曹魏康僧鎧譯				○	○	○	○	○

（註1）：房山石経は上部が剥落していて見えない。×はその見えない部分に当たる。
（註2）：明版には巻上の尾題無し（以下、「一」とは該当部分が原本に無いことを示す）。
（註3）：中尊寺本の巻下冒頭から「等觀三界」（『聖典全書』49頁7行目）まで1332字欠落（藤田宏達氏論文「浄土三部経の日本古写経」参照）。
（註4）：中尊寺本の巻下の尾題について、「雙觀」と「卷」は右傍書（同上論文参照）。

ることが確認できた。

③諸本における字句の相違から

字句の相違とは言ってもすべてを挙げることは難しいので、まず「碼碯」「琥珀」「硨磲」「玻瓈」の字について検討することにした。これらの文字は巻上のなかに何カ所か出てくるので、諸本を比較するには適しており、諸本の特徴を捉えやすいと判断した。また巻下のなかにある字句についても検討した結果、「菩薩聲聞大衆」の字句を取り上げることにした。さらに「人天」についても付け加え、まとめたものが表③である。表③では敦煌写本も含めているが、敦煌写本については後に検討する。

表③より確認できる大蔵経と日本写本・刊本の関係で、まず、金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本といった日本B経について、金版との同字率が八割近くあるのが「碼碯」、金版とすべて一致が「硨磲」「玻瓈」「菩薩聲聞大衆」である。「硨磲」「玻瓈」「菩薩聲聞大衆」においては、高麗版ともすべて一致している。日本A経とした中尊寺経と七寺本と七寺上本については、開元寺版と明版と清版と同字数が高いのは「碼碯」、思渓版と同字数が高いのは「琥珀」、江南諸蔵の各本と同字数が高いのは「硨磲」「菩薩聲聞大衆」である。

つまり、日本A経について、具体的な系統を見出すことは難しいが、日本B経における用語の使用例から高麗版金版の系統に近いということが言えるであろう。

④「人天」と「天人」

系統をみていくうえで決定的な相違がある。藤田氏も指摘しているように、[24]四十八願文の「人天」の語である。『大無量寿経』全体をみると、一九カ所を確認できる。表③にも示しておいたように、「天人」とあるのは、房山石経・

開元寺版・思渓版・線装本・杏雨本・元版・明版・清版・天平本・中尊寺本・七寺本・七寺上本である。一方、「人天」とあるのは、高麗版・金版・金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本である。

すなわち、「人天」グループの高麗版と金版と日本B経、「天人」グループの房山石経と江南諸蔵と日本A経[25]に分けることができる。

以上の結果から、日本B経の系統は高麗版金版の系統であると言うことができよう。一方、日本A経の系統についてはさらに考証をすすめる必要がある。

(三) 房山石経について

先ほど房山石経を江南諸蔵・日本A経と同じグループに入れたことについて、表①を見ながら検証していく。江南諸蔵の各本において、房山石経を対照とした同字率は五〇%ほどである。一方、房山石経においても、江南諸蔵のそれぞれを対照とした同字率は、他の諸本を対照とした同字率と比べて高い傾向にある。江南諸蔵の各本と房山石経との関係は他の諸本と比較すると遠くはない、と判断をすることができる。また、表①のなかの日本写本・刊本をみると、房山石経を対照とした同字率の数値が高い諸本は、天平本（五四%）・荒川本（五二%）・中尊寺本（四八%）である。それらは日本A経の写本である。一方、金版に高い数値を示している日本B経において、房山石経を対照とした同字率は高い数値を示していない。

また『大無量寿経』の冒頭について、高麗版・金版・江南諸蔵のすべての諸本では「我聞如是」ではじまるのに対し、房山石経は「如是我聞」ではじまる。つまり、「如是我聞」ではじまることが房山石経の特徴といえよう。日本A経の天平本・七寺本においても「如是我聞」ではじまる。中尊寺本は本文の右傍に「如是我聞」と記されているようである。[26] つまり、日本A経は日本B経に比べて房山石経に近い、と言えよう。しかしながら、房山石

龍大本	大谷大本	秘笈本	房山石経	高麗版	金版	開元寺版	思渓版	線装本	杏雨本	元版	明版	清版	日本A経					日本B経(註)
													天平本	中尊寺本	七寺本	七上本	荒川本	
	天人	天人	天人	人天	人天	天人	天人	天人	天人	天人	天人	天人	天人	天人	天人	天人		人天
			9			1	3	4	4	4	14	11		9	11	11		
						13	10	9	9	10		3	9					
				13														
14	14	14	1	1	14		1	1	1				5	5	3	3		11
																		3
	1		4	3		4	2	3	3	4	4	4		2	2	2		
	3	4																4
4				1	4		2	1	1				4	2	2	2		
						12	12	12	12	13	13	13	4	7	8	8		
5	13	13	3	13	13								9	6	5	5		13
			6															
						1	1	1	1									
											2	2			1			
			2			2	2	2	2	2								
2	2	2		2	2								2	2	1	2		2
	1			5	1	1	1	1	1	1	1	1		2	2	1		5
1		1	4			4	4	4	4	4	4	4	1		2		4	
															1			

【表③】

		S1本	S2本	S3本	S4本	中1本	中2本	中3本	中4本	中5本	上海図本	北京大本	ペリオ本	R3本
人天(19)					天人	天人	天人	天人	天人					
碼碯(14)	碼碯													
	碼碯													
	瑪碯													
	馬碯						14	14	14			8		1
	馬腦													
琥珀(4)	琥珀													
	虎魄						3		4			1		1
	虎珀						1	4				2		
硨磲(13)	硨磲													
	車渠						13	13	13			9		1
	瑋渠													
	車磲													
玻瓈(2)	玻瓈													
	頗瓈													
	頗梨						1	2	2					
	頗利						1							
菩薩聲聞大衆(5)	菩薩聲聞大衆								1					
	菩薩聲聞之衆	2	1	4			1	1		1	1		1	
	菩薩聲聞之大衆													

(註) 日本B経とは、金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本を指す。

経と江南諸蔵の関係を同一系統と言っているのではない。

「如是我聞」と「我聞如是」の相違に加えて、巻上の尾題の房山石経が「佛説無量壽經卷上」であるのに対し、前述したように江南諸蔵の各本では「無量壽經卷上」となっている。首題・尾題・訳者名に関しても、房山石経は見えない部分が多いので、そのすべてを比較することはできないが、唯一見えている箇所は相違している。

すなわち、房山石経と江南諸蔵の系統は違うのであるが、『大無量寿経』に関しては文字の異同、同字率を見ると両本は遠くない、ということである。[27]

(四) 敦煌写本の系統

敦煌写本は房山石経にもっとも近いと言われるが、[28] また西域からは、開宝蔵系や契丹蔵系と江南諸蔵系の写本の断片が出土している、とも言われる。[29] そこで敦煌写本の系統について、開宝蔵系統（高麗版金版の系統）か、契丹蔵系統（房山石経の系統）か、江南諸蔵に近い系統[30]かを検討していった。

まず、経題について表②で示しておいた。巻上の尾題（中2本・龍大本・大谷大本）と巻下の尾題（中5本・S2本・S3本）しかない。巻上の尾題では、中2本・龍大本ともに「無量壽經卷上」とあり、高麗版・金版・開元寺版・思渓版・線装本・杏雨本・元版と同じである。大谷大本では「佛説無量壽經上」とあるが、単に「巻」を脱字したと考えると、「佛説無量壽經卷上」の房山石経と同じである。また、巻下の尾題では、中5本・S2本・S3本が「無量壽經卷下」とあり、高麗版・開元寺版・思渓版・元版と同じである。

前に系統をみていくうえで決定的な相違として挙げた「天人」か「人天」かについて、表③にも示したように、該当箇所のある敦煌写本のすべて（中1本・中2本・中3本・中4本・S4本・大谷大本・秘笈本）は「天人」である。その他の敦煌写本については、該当箇所がないので不明であり、前の大蔵経と日本写本・刊本の系統分

けのように、「天人」か「人天」かで系統分けをすることはできない。そこで表④を作成し、さらに検討をすすめていくことにした。表の見方は表①と同様とし、前に掲げた敦煌写本のなか、短い断片本については表に示さず[31]、一八本の敦煌写本を対象とした。表③と並行して見ながら、敦煌写本の系統の考察を進めていった。表③では「碼碯」「琥珀」「硨磲」「玻瓈」「菩薩聲聞大衆」の字について、前と同様に用例数を示している[32]。表の見方で注意していただきたいことは、大蔵経と日本写本・刊本を考察する時にも同じことが言えたのだが、例えば「碼碯」であれば、諸本によって5つの字体で示されているが、本論文では蔵版本（『聖典全書』の底本）の字体ですべてを表している。例えば北京大本において、「碼碯」をみていくと、『大無量寿経』全体で「碼碯」は一四例あるが、北京大本ではそのなか、八例が含まれ、すべて「馬瑙」と書かれていることを示している。一四例中八例といったのは北京大本は経の一部分しかないからである。他本についても同様である。「琥珀」の場合は『大無量寿経』全体の四例中、北京大本は三例があり、「虎魄」一例と「虎珀」二例があることを示している。表④の下部には諸本の系統、諸本の系統と推測できるものを示した。表③での使用字の一致数の多いもの、すなわち同字数の多いものが、必ずしも表④で同字率が高いということはない。そういったケースは他の用例をみながら、慎重に判断したが、それでも断定しづらいものに関しては表中の系統の部分に、一応の系統を示した後に「?」を付した。

以上のように、敦煌写本の系統について、契丹蔵系統（房山石経の系統）だけでなく、開宝蔵系統（高麗版金版の系統[33]）もあり、江南諸蔵に近い系統、つまり江南諸蔵の祖本に近い写本も存在するのではないか、と思われる。

（五）日本写本・刊本と敦煌写本

藤田氏は「平安後期の写経には、（中略）奈良写経からの転写本と推定されるものが多い。（中略）全体として蔵経本よりは敦煌本・トゥルファン本の系統と近似しているものが少なくない[34]」と述べているように、日本写本・

中４本	中５本	中６本	上海図	北京大	ペリオ	Ｒ１本	Ｒ３本	龍谷大	大谷大	秘笈本
153	37	9	96	61	42	11	11	135	169	143
48/125 38%	19/31 61%	4/9 44%	28/85 33%	16/50 32%	12/37 32%	5/10 50%	4/10 40%	43/69 62%	64/136 47%	43/117 37%
83 54%	17 46%	8 89%	32 33%	30 47%	13 31%	6 55%	5 45%	51 38%	81 48%	50 35%
92 60%	— —	9 100%	— —	39 61%	— —	— —	6 55%	67 50%	91 54%	61 43%
64 42%	20 54%	6 67%	49 51%	27 44%	22 52%	7 64%	4 36%	53 39%	75 44%	57 40%
65 42%	20 54%	6 67%	50 52%	27 42%	23 55%	7 64%	4 36%	50 37%	72 43%	49 34%
65 42%	17 46%	6 67%	39 41%	26 41%	17 40%	5 45%	4 36%	50 37%	71 42%	50 35%
65 42%	19 51%	6 67%	47 49%	26 41%	20 48%	7 64%	4 36%	50 37%	71 42%	50 35%
64 42%	17 46%	6 67%	39 41%	26 41%	17 40%	5 45%	3 27%	45 33%	70 41%	46 32%
56 37%	15 41%	5 56%	38 40%	23 36%	16 38%	5 45%	3 27%	39 29%	63 37%	39 27%
56 37%	15 41%	5 56%	37 39%	23 36%	15 36%	5 45%	3 27%	40 30%	63 37%	39 27%
73 48%	— —	3 33%	— —	33 54%	— —	— —	5 45%	72 54%	88 52%	71 50%
30 20%	6 16%	3 33%	17 18%	15 23%	11 26%	1 9%	4 36%	22 16%	29 17%	26 18%
65 42%	11 30%	7 78%	20 21%	32 52%	8 19%	5 45%	4 36%	55 41%	62 37%	60 42%
57 37%	12 32%	3 33%	32 33%	23 36%	18 43%	3 27%	3 27%	48 36%	64 38%	45 31%
— —	16 43%	— —	40 42%	— —	19 45%	5 45%	— —	— —	— —	— —
66 43%	14 38%	4 44%	35 36%	21 33%	16 38%	4 36%	7 64%	49 36%	76 45%	60 42%
73 48%	— —	4 44%	— —	21 33%	— —	— —	6 55%	50 37%	79 47%	54 38%
64 42%	3 8%	6 67%	10 10%	32 52%	3 7%	1 9%	4 36%	22 27%	61 36%	57 40%
69 45%	15 41%	7 78%	36 38%	34 55%	22 52%	4 36%	4 36%	25 31%	66 39%	61 43%
開宝蔵系統	契丹蔵系統	開宝蔵系統	江南諸蔵系統	開宝蔵系統	江南諸蔵系統	江南諸蔵系統？	開宝蔵系統	契丹蔵系統	開宝蔵系統	開宝蔵系統？

【表④】

		S1本	S2本	S3本	S4本	中1本	中2本	中3本
	【全体】	106	115	134	35	101	170	119
対照とする諸本	房山石経	38/92 41%	40/100 40%	47/114 41%	22/30 73%	33/ 79 41%	73/134 54%	38/94 40%
	高麗版	42 40%	38 33%	48 36%	11 31%	48 48%	68 40%	56 47%
	金版	— —	— —	— —	11 31%	46 46%	85 50%	72 61%
	開元寺版	64 60%	56 49%	73 54%	25 71%	59 58%	86 51%	54 45%
	思渓版	63 59%	57 50%	74 55%	24 69%	57 56%	78 46%	50 42%
	線装本	53 50%	46 40%	61 45%	24 69%	57 56%	78 46%	48 40%
	杏雨本	56 53%	52 45%	67 50%	24 69%	57 56%	78 46%	48 40%
	元版	53 50%	47 41%	61 46%	24 69%	58 57%	77 45%	46 39%
	明版	50 47%	44 38%	58 43%	22 63%	55 54%	71 42%	41 34%
	清版	49 46%	43 37%	57 43%	22 63%	56 55%	71 42%	41 34%
	天平本	— —	— —	— —	23 66%	49 49%	95 56%	63 53%
	金戒光明寺本	19 18%	20 17%	26 19%	2 5%	12 12%	29 17%	26 22%
	清浄華院本	23 22%	24 21%	41 31%	8 23%	19 19%	29 17%	57 48%
	中尊寺本	42 40%	43 37%	41 31%	19 54%	47 47%	66 39%	47 39%
	荒川本	51 48%	49 43%	67 50%	— —	— —	— —	— —
	七寺本	45 42%	45 39%	62 46%	22 63%	51 50%	80 47%	57 48%
	七寺上本	— —	— —	— —	20 57%	53 52%	81 48%	52 44%
	正平本	9 8%	10 9%	16 12%	5 14%	19 19%	65 38%	57 48%
	祐誓寺本	48 45%	48 42%	64 48%	5 14%	21 21%	69 41%	62 52%
	系統	江南諸蔵系統	江南諸蔵系統？	江南諸蔵系統	契丹蔵系統	江南諸蔵系統	契丹蔵系統	開宝蔵系統

刊本は敦煌写本の系統と同じく唐代の中原仏教の伝統を引き継ぐものの影響を受けているのであろうか。[35]

そこで、『大無量寿経』の出世本懐の文の前半部分、「如来以無蓋大悲矜哀三界」[36]の箇所を見ていく。「如来以無蓋大悲矜哀三界」の中の「無蓋大悲」は、高麗版・金版・開元寺版・思渓版・杏雨本・元版・明版・清版では「無盡大悲」とあって、線装本では「無害大悲」とあるが、親鸞聖人は『教行証文類』「教文類」の引文[37]では「無蓋大悲」とされている。それについて藤田氏は、「親鸞がはたしてどのような系統の『無量寿経』を依用していたのか、究明すべき問題が生じ、それは流布本と蔵経本の異読に関わることが判明する」[38]と述べている。蔵版本では「無蓋大悲」となっているが、大蔵経のなか、線装本だけが「無害大悲」である。「害」は「蓋」の音通字とも解釈できるが、敦煌写本の、中1本では「無蓋大悲」と書かれている。[39]したがって、親鸞聖人は複数ある経本のなか、「無蓋大悲」と書かれた系統のテキストを参照して、『教行証文類』「教文類」の該当箇所を書かれたのではないか、と推測できる。

本論文では原則的に異体字を正字に変更して表に示しているが、「碼磼」の「磼」について、天平本では「惣」と表記されているようである[40]（表では正字で「瑙」と示した）。他本をみると、「惣」と表記しているのは、中尊寺本では一箇所だけであり、敦煌写本では「碼磼」が該当するすべてのテキスト（中2本・中3本・中4本・北京大本・R3本・龍大本・大谷大本・秘笈本）のすべての文字が「惣」であることを確認した。中尊寺本の他の部分や七寺本や七寺上本では「瑙」あるいは「磼」を、高麗版・金版・日本B経では「瑙」を用いているが、江南諸蔵の各本では「瑙」を用いている。また、「琥珀」について金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本といった日本B経では、「虎魄」が使われ、敦煌写本と同じ字である。房山石経や高麗版等の大蔵経のすべてと天平本を含めた日本A経では、「琥珀」あるいは「虎珀」が使われ、「虎魄」が使われているテキストは無い。即ち、奈良写経である天平本で確認できないにも関わらず、敦煌写本や一部の日本写経で共通して用いられている字体と

言える。後に挙げる「懲」についても同様である。

つまり、「恐」については、奈良写経が中国唐代の経典の諸相を忠実に伝えている文字とすることが出来る。[41]一方、「虎魄」のように、敦煌写本や一部の日本写経で共通して使われている字体が、奈良写経では確認出来ない場合がある。また、成立の古い段階に属する内容が存在すると言われる開元寺版、ならびに天平本だけが、「瑠璃」の四箇所において、「流離」とされていることを確認することができた。当時の時代背景等についても考慮しながら、今後さらに検討しなければならない。

以上のように、日本写本・刊本は、敦煌写本の系統と同じく唐代の中原仏教の伝統を引き継ぐものの影響を受けている可能性を示すことが出来た。

(十六) 日本B経について

日本B経とした金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本について、それらの関係性について窺う。まず、書写の形式をみると、金戒光明寺本は、各巻の第一紙のみ二六行、第二紙以降は二七行で、一行一七字。清浄華院本は、各巻の第一紙のみ二四行、第二紙以降は二五行で、一行一七字。祐誓寺本は、各巻の第一紙のみ二三行、第二紙以降は二四～二五行で、一行一七字である。また、正平本は、半葉六行、一行一七字である。『大無量寿経』全体の八七箇所の改行箇所[42]を詳細にみると、金戒光明寺本の讃仏偈では、一行四句（一六字）ではなく、一行が一五～一七字と乱れているものの、それ以外、金戒光明寺本と祐誓寺本は全く改行箇所が同じであった。偈以外の本文で一行一八字の箇所も両本は同じであった。清浄華院本においても、一行一八字の箇所は一七字に整えられているが、それ以外は両本とも同じ改行箇所であった。また、正平本では改行箇所の相違は六箇所あり、その内訳は、五箇所で改行箇所の追加、一箇所で改行していない。

また、表①を見ると、金戒光明寺本と清浄華院本と祐誓寺本と正平本との同字率は高い。そのなか特に、金戒光明寺本において祐誓寺本との同字率九六％と非常に高い。祐誓寺本とは、建仁四（一二〇四）年の日本における現存最古の浄土教関係の版本である。[43] 祐誓寺本のなか、注目すべき字は「懃」である。「勤苦」「勤精進」等で用いられる「勤」が、祐誓寺本では「懃」という字を用いている。ここで取り上げた諸本のほとんどが「勤」となっているが、金戒光明寺本においても「懃」となっている。つまり、『大無量寿経』に関してであるが、金戒光明寺本、或いは金戒光明寺本と同系統の本が、祐誓寺本の底本となったと断言して良いだろう。また、敦煌写本（上海図本・ペリオ本・中5本・S1本・S2本・S3本・秘笈本・大谷大本）の当該箇所のほとんどにおいて、「懃」となっていることも大変興味深く、日本写本・刊本と敦煌写本との関係をみていく上で、さらに検討していくべきことであろう。

四、小結

以上のように『大無量寿経』の諸本について、文字の異同等に注目しつつ、竺沙氏の分類に基づきながら、系統分けを試みた。

まず、本論文で取り上げた『大無量寿経』の日本写本・刊本について、日本A経と日本B経に分類した。すなわち、文字の異同からはじき出した同字率、さらに経題・訳者名からおおまかな系統の相違を見出し、表③に挙げた用語の使用例において、金戒光明寺本と清浄華院本と正平本と祐誓寺本の日本B経が完全に合致すること、各本の行数や字数や改行箇所が同じ、或いは非常に類似しているということから日本B経は同系統で、それ以外の天平本や中尊寺本や荒川本や七寺本や七寺上本といった日本A経と系統を分けた。さらに具体的な系統となると、さらに考証が必要となってくるが、日本B経は開宝蔵系統ではないかという可能性を示しておく。

一方、日本A経の方は、日本B経の系統とは相違するだろう。契丹蔵系統（房山石経系統）か、江南諸蔵に近い系統かについての判断は難しく、絞り込むことは出来ない。経題や経の冒頭部分が房山石経と同じく「如是我聞」である天平本や七寺本、その両本と荒川本や七寺上本はそれぞれ同字率が高いということから、日本A経は房山石経の系統である契丹蔵系統ではないかとも思われる。また、日本A経は江南諸蔵の各本との同字率が高いことから江南諸蔵の祖本に近い系統とも思われる。

また、『大無量寿経』の敦煌写本について、表④に一応の系統を示した。つまり、敦煌写本は契丹系統が多い、という竺沙氏の指摘に対して、開宝蔵系統や江南諸蔵に近い系統も含まれるという結論を出した。また、敦煌写本と江南諸蔵の各本との同字率をみると、開元寺版や思渓版が一番高い傾向にあるということから、江南諸蔵の祖本と敦煌写本の関係が考えられるのではないだろうか。そういうことから江南諸蔵に近い系統があると示したのである。また、開元寺版と房山石経と一部の敦煌本は、天平本と同系統と見ることができるかもしれないとも言われている。[44] 文字の異同を見てると、そのような傾向も見られなくもない。それについては今後、東禅寺版も含めて検討していきたいものである。

以上のように、『大無量寿経』についての諸本の系統分けを考察した。これらの系統分けは『大無量寿経』についてのものであり、『観無量寿経』や『阿弥陀経』についても考察していくと、さらに新たなことが見い出せるかもしれない。また、もう少し漢字に厳密に、各本の字体を突きあわせて、諸本を比較していくと新たな展開が生まれるかもしれない。また、実際に原本の写真等で披見出来ていない諸本についても、漢字の字形や経の体裁等も含めて考証したいものである。今後の課題としたい。

〔附記〕

最後になりましたが、藤田先生には『浄土三部経の研究』（岩波書店　二〇〇七年三月）、「『無量寿経』の日本最古の版経と写経」（『印度哲学仏教学』第五号　一九九〇年一〇月）、「浄土三部経の日本古写経」（『印度哲学仏教学』第二二号　二〇〇七年一〇月）につきまして、論考をすすめていくうえで、大いに参照させていただきました。心から感謝申し上げます。

本論文で取り上げた諸本に関しまして、金戒光明寺・清浄華院・浄土真宗本願寺派・増上寺・祐誓寺・龍谷大学図書館、それぞれの所属機関当局ならびに関係の方々より使用許可を頂きました。衷心より感謝の意を表します。また、京都国立博物館・宮内庁書陵部の所属機関当局ならびに関係の方々より、資料の複写の便宜をはかって下さいました。深く感謝申し上げます。また、近年、インターネットサイトやブログ等で掲載された所蔵資料の無断転載が目立つようになり、各所属機関の関係の方々はその対応に苦慮されているようです。無断転載を慎んで頂くよう申し添えておきます。

また、本論文において当研究所研究員の佐々木大悟氏に多大なるご教示を賜りました心から感謝致します。

なお、各先生方の敬称につきましては、博士を取得されている先生もおられますが、本論文では氏で統一しました。

【註】

（1）竺沙雅章氏著『宋元仏教文化史研究』（二〇〇〇年　汲古書院）

（2）『中華大蔵経』所収の諸本は主として金蔵広勝寺本を底本としているが、『大無量寿経』の底本は金蔵大宝集寺本である。金版大蔵経は広勝寺本・大宝集寺本の他に、興国寺本・天寧寺本があると言われる（『中華大蔵経』冊一（折り込み別冊）「中華大蔵経漢文部分内容簡介」参照）。

（3）宮内庁書陵部所蔵の大蔵経は、藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』（岩波書店　二〇〇七年）の諸本対照表で示されていたよう

に福州版であり、東禅寺版と開元寺版の混合版であるが、そのほとんどは開元寺版であると言われている（椎名宏雄氏著『宋元版禅籍の研究』大東出版社　一九九三年　二〇二頁）。なお、『無量寿経』の巻首に開元寺版である旨の題記があるので、本論文では「開元寺版」と表記を統一した。

また、出来れば東禅寺版も用いて論考をすすめたかったが、東禅寺版を入手することができなかった。今後の課題としたい。

(4) 本論文において、①線装書局本、②杏雨書屋蔵本の二本を磧砂版として出した。杏雨書屋蔵本の『平等覚経』では思渓版の文章が混在していたということもあり、また元・明版の文章によって補われたといわれる巻も存在し（椎名宏雄氏著『宋元版禅籍の研究』二六三～二七三頁参照）、純粋な磧砂版ではないのではないか、という問題もあるが本論文では磧砂版として扱った。ちなみに、①線装書局本については、藤田宏達氏は二〇〇七年時点では、用いられていないようである。

(5) 『磧砂大蔵経』全一二〇冊　線装書局　二〇〇四年一〇月

(6) 『佛教大学佛教文化研究所年報』第一・三号所収（一九八四年三月・一九八五年三月）

(7) 本論文において『明代大蔵経史の研究』（野沢佳美氏著　汲古書院　一九九八年）を参照した。

(8) 『新編縮本　乾隆大蔵経』台北・新文豊出版　五七三～六〇七頁

(9) 房山石経は主に隋代・唐代・遼代のものがあり、『大無量寿経』については、藤堂恭俊氏によると、遼の第八代皇帝道宗の清寧二年から四年（一〇五六年から一〇五八年）頃の刻造と推定されている（『仏教大学佛教文化研究所年報』第五号　一九八八年）。刻経石の上部が剥落しているのが惜しまれるが、巻下の経題の下に刻まれている「服」という字は『契丹大蔵経』の帙番号であり、『房山石経』は契丹蔵系であることを立証していると言われている（藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』五五五～五五六頁）。また、竺沙雅章氏によれば、隋唐の時代の石経は縦長の大きな碑だが、遼代の後半になると、横長の小ぶりの石経になる、と述べている（『宋元仏教文化史研究』二八七頁）ことからも、『大無量寿経』の石経は縦長のものなので、遼代前半ということになる。しかしながら、第二期の遼金時代の石経は、契丹蔵が底本と言われているものの、何故遼代後半に入ると形状が変わるのか。また、氣賀澤保規氏は竺沙氏の説に対して、遼代に再出発した刻経事業に雲居寺が所蔵していたと想定される大蔵経がどう関与するのか等、ややはっきりしない印象を受けるとし、雲居寺所蔵の唐代大蔵経を前面に出すことで、雲居寺の位置および契丹大蔵経への影響を見直すことはできないだろうか、と述べている（気賀澤保規氏編『中国仏教石経の研究―房山雲居寺石経を中心に―』京都大学学術出版会　一九九六年　八九頁）。筆者も『大無量寿経』の房山石経について疑問に思うところであり、今後の課題としたい。

(10) 上海図書館所蔵本について、藤田宏達氏は二〇〇七年時点では用いられていないようである。

(11) 北京大学図書館蔵本について、藤田宏達氏は二〇〇七年時点では用いられていないようである。

(12)『敦煌秘笈』所収本（『無量寿経』巻下（断片））は、二〇〇九年三月に杏雨書屋から『敦煌秘笈』影片九冊において公刊された。東洋学の泰斗であった羽田亨氏の旧蔵にかかる敦煌文庫の集成である。藤田宏達氏は『浄土三部経の研究』（二〇〇七年五四七頁）において、李盛鐸旧蔵の北魏写本『無量寿経』巻下は、現在実物を確かめることができない、と言われていた。また、落合俊典氏は「李盛鐸と敦煌秘笈」（『印度学仏教学研究』第五十二巻第二号　平成十六年三月）において、近年、注目している『敦煌秘笈』について論じている。ちなみに、『敦煌秘笈』所収本について、藤田宏達氏は二〇〇七年時点では用いられていないようである。

(13)藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』「附章　浄土三部経の諸本対照表　I、『無量寿経』の諸本対照表」の三四～七〇頁を全体的に参照した。

(14)以上の日本写本・刊本の中、金戒光明寺本・清浄華院本・正平本・祐誓寺本については、披見することが出来たので、本論文で取り上げた。また、天平本・中尊寺本・荒川本・七寺本・七寺上本に関しては、註（15）で示す藤田氏の論文中にある校勘表で取り上げていたので、本論文において扱うこととした。

(15)藤田宏達氏「『無量寿経』の日本最古の版経と写経」（『印度哲学仏教学』第五号　一九九〇年一〇月）の一八～二九頁における天平本の校勘表に拠った。藤田宏達氏「浄土三部経の日本古写経」（『印度哲学仏教学』第二二号　二〇〇七年一〇月）の七～二五頁における中尊寺本・七寺本・七寺上本・荒川本の校勘表に拠った。

(16)『浄土真宗聖典全書』（三経七祖篇）は、浄土真宗本願寺派総合研究所（教学伝道研究室聖典編纂担当）編纂、本願寺出版社より二〇一三年三月に出版された。『浄土真宗聖典全書』（三経七祖篇）所収の『大無量寿経』は、浄土真宗本願寺派の本山蔵版本を底本としている。藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』（「諸本の解説」一四五頁）によると、浄土真宗本願寺派の本山蔵版本は流布本であると述べている。

(17)藤田宏達氏によれば、天平本・中尊寺本・荒川本・七寺本・七寺上本の日本写経の中には、誤字・脱字・衍字等が多く、訂正の符号や欄外・行間の訂正字が多いと言われる。また異体字が非常に多く用いられており、藤田氏の判断で、特別な場合を除いて必要な限り現行の旧字体に改めたとされる。本論文においては、原則的には藤田氏の校勘表のなか、誤字・脱字・衍字と思われるものは採用しなかった。また、天平本については、親文字の上下左右に書き改められている字も藤田氏の校勘表に示してあったが、そうような校合書入れは平安時代の筆と言われているので、本文の親文字のみを採用した。

(18)藤田氏は『浄土三部経の研究』「附章　浄土三部経の諸本対照表　凡例」において、漢字の異体字等の判断の基準を示している。一方、筆者は出来るだけ異体字と判断することを避けるようにしつつも、そうすることによってかえって煩瑣となることも考

慮しながら、系統分けの重要な判断のもとになるので慎重に行った。最低限の異体字の判断として、「難字大鑑」編集委員会編『異体字解読字典』（柏書房　一九八七年）、李圭甲編『高麗大蔵経異体字典』（高麗大蔵経研究所　二〇〇〇年一二月）、黄征著『敦煌俗字典』（上海教育出版社　二〇〇五年五月）、潘重規主編『敦煌俗字譜』（台北・石門図書公司　一九八七年八月）等の書を参照し、適宜取捨した。具体的には、「妓」と「伎」、「花」と「華」、「旛」と「幡」、「勤」と「懃」、「繞」と「遶」、「果」と「菓」、「耀」と「曜」、「脇」と「脅」、「犍」と「揵」、「挍」と「校」、「支」と「枝」、「徧」と「遍」、「屏」と「并」などに関して藤田氏は異体字（俗字・略字・音通字等も含む）として文字の相違と見ないとしているが、本論文では以上のような文字の相違も系統分けの判断には必要とし、文字の相違の数に入れた。

(19) 竺沙氏は分類の根拠として、版式と千字番号の違いで分けているが、本論文では同字率から系統の違いを明らかにしていこうとする視点で考察を進めている。
また、開元寺版以降の大蔵経の諸本すべてを対象とすると、煩瑣になるため、明版と清版を除いた思渓版・線装本・杏雨本・元版の江南諸蔵を対象として考察をすすめていく。

(20) この分類分けは同字率をもとに日本写本刊本のグループ分けをしようとするものであり、江南諸蔵そのものが日本のどの写本に影響を与えたのかというものではない。

(21) 金版は巻上のみ、巻下は無い。

(22) 『第八一回大蔵会展観目録　浄土教と平安写経・七寺の世界』（平成九年）の解題を参照。

(23) 藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』五九三頁

(24) 藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』五八四頁

(25) 荒川本は巻下のみ。「人天」の箇所は無い。

(26) 前掲藤田氏論文「『無量寿経』の日本最古の版経と写経」参照

(27) ただし、開元寺版と思渓版以降の大蔵経の文字が異なり、房山石経や日本A経とが同じ字であるケースを十数例確認できる。藤田宏達氏は、その開元寺版と房山石経と一部の敦煌本は、天平本と同系統であると述べている（『浄土三部経の研究』五八四頁）。それについて、『続高僧伝』の福州版の中に、高麗（再雕）本や思渓版と相違する語句や段落部分があり、それは日本古写経本とほぼ一致するものであること、福州版には成立の古い段階に属する内容が存在する、という近年の発表の内容と合致する。（伊吹敦氏「『続高僧伝』の増広に関する研究」『東洋の思想と宗教』第七号　一九九〇年、斉藤達也氏"Features of the Kongo-ji version of the Further Biographies of Eminent Monks 続高僧伝：With a focus on the biography of Xuanzang 玄奘 in the fourth

fascicle"『国際仏教学大学院大学紀要』第一六号　二〇〇二年、池麗梅氏「『続高僧伝』テキストの変遷―写本から刊本へ」二〇一三年一〇月五日「公開シンポジウム　宋版大蔵経研究の現在」講演資料集　参照）

(28) 竺沙雅章氏著『宋元仏教文化史研究』「第二部宋元版大蔵経の系譜　第三章『開宝蔵』と『契丹蔵』　三『契丹蔵』の版本上の位置」三二三～三二九頁

(29) 竺沙雅章氏「西域出土の印刷仏典」（『龍谷大学西域研究叢書4　旅順博物館蔵トルファン出土漢文仏典研究論文集』所収　二〇〇六年三月）一一八頁

(30) つまり、江南諸蔵の祖本に近い敦煌写本という意味での系統である。

(31) R2本・B本・叢本に関しては、文字の相違の数が少なく、表2には表さなかった。

(32) ここでは異体字を通行体に変更して表に示している。

(33) 本論文では、高麗版は再雕本なので、表④に開宝蔵系統と示した敦煌写本において、金蔵の同字率は高いが、高麗版の同字率はそれ程高くないものもある。

(34) 藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』五九三～五九四頁

(35) 最近、日本古写経本のなか、奈良写経の転写本ではない開宝蔵からの転写本も存する、と言われている。（楊婷婷氏「日本古写経本『出三蔵記集』の系統について―興聖寺本を中心に―」『印度学佛教学研究』第六二巻第一号　平成二五年一二月）

(36) 『浄土真宗聖典全書』一　三経七祖篇　十九頁

(37) 『浄土真宗聖典全書』二　宗祖篇上　十一頁

(38) 藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』五五八頁

(39) 藤田氏は「無盡大悲」と読まれているようだが、「無蓋大悲」ではないか、と思われる（『浄土三部経の研究』附章浄土三部経の諸本対照表　三八頁）。

(40) 天平本と中尊寺本と七寺本と七寺上本については、披見する機会を得られていないので、藤田氏の校勘表に拠った。

(41) この考察の方向については、橋本貴朗氏「古写経の中の異体字」（『いとくら』第五号　二〇〇九年一二月　九頁　参照）よりヒントを得た。

(42) 偈の最初と最後は含めたが、偈の中での改行は含まない。願文の中での改行、巻末における本文と尾題の間の改行は含む。

(43) 藤堂祐範氏著『浄土教版の研究』（山喜房佛書林　一九七六年二月）二二五～二二六頁　参照

(44) 藤田宏達氏著『浄土三部経の研究』五八四頁